

中世山城跡の近世遺物

堂 込 秀 人

Relics of the Edo Era Excavated from a Hill Fort in the Middle Ages

Dogome Hideto

要旨

県内に841か所現存しているという中世山城跡が発掘調査の対象とされてきて、そのうちいくつかの中世山城跡で近世の遺物が出土している。シラスの削り出しにより作られることの多い南九州の山城跡が、全てではないが現在まで良く保存され、「城山」などと呼ばれ地域の文化財として認識されていることは、幕藩体制下の外城制と関わっているのではないかと考えた。元和の一国一城令以後、廃城されたはずのこれらの中世山城跡が、有事の際には即応できるようになっていたとすれば、外様の雄藩である薩摩藩のしたたかさをうかがうことができる。

キーワード：一国一城令 外城制 御城内山留役

1 はじめに

中世山城跡の発掘調査は、近年文化財保護の観点から進められるようになり、なお現在も範囲確認や保護施策の前段階としての発掘調査や報告書作成が、知覧町知覧城跡、高山町高山城跡、東郷町の鶴ヶ岡城跡、上屋久町楠川城跡、須賀町須賀城跡と進められている。宅地造成やシラス取りで、常に破壊の対象となりやすい城跡が、事前に発掘調査されるようになったことは、本県の埋蔵文化財保護の質的な転換の象徴的な事例である。対処療法的な埋蔵文化財保護行政からの脱却である。こうした発掘調査に取り組む市町村の進んで来た道は厳しく、そして今後の歩む道も決して安易ではないが、とにかく一歩踏み出したということである。これらの発掘調査の企画から携われて来た文化財担当者はもちろん、それ以外の周囲の方々の理解・支援がなければならぬことであり、その労苦に対しても心から敬意を表するものである。

さてそれらの成果は着実にあがり、考古学的な成果も大きいものであるが、今回は中世に築城され、使用され、元和の「一国一城令」により廃城したはずの中世山城跡から出土する近世の遺物について考察したい。筆者も串木野城跡の発掘調査に携わったときに、竹林で覓れてはいたが、曲輪や土塁がよく保存されていて、串直に「どうして廃城後には400年たっているが、こんなに残りがいいのか」という疑問が生じた。地主でもあり発掘調査に協力していただいた奥田氏や肝付氏の話や作業員として協力していただいた麓の皆さんの話を聞いてみて、城跡への侵入口は奥田氏と肝付氏の住宅のすぐ近くにあり(第1図)¹⁾、だれでも入られる状況ではなかったこと、城跡を通して自らの祖先の人々への敬意と住んでいる土地の歴史性への関心の高さを知った。つまり一朝事が起これば、すぐにでも使える城跡

であるのだ。これは教科書的には、幕府の武家諸法度に反し、徳川幕府の諸施策からは信じられないことであった。軍事にも関わるこうしたことは、口伝されてきても文書としては残らないのが常識であろう。史料がなければ、まさに考古学的な手法が生かされる。ここでは、発掘調査を中心として、中世山城のその後について考察するものである。

2 鹿児島の中世山城跡の研究概略(文中は敬称略)

中世山城跡の研究史は詳しくは三木増による「研究資料よりみた本県の中世山城跡」²⁾にまとめられている。近代に多くの郷土史家によって戦国の人物研究からのアプローチがあったが、ここでは中世山城跡という遺構に絞り、近年のものを中心としておもなものを述べさせてもらいたい。中世山城跡の調査は、史料研究と縄張り研究、発掘調査の3つの柱があると考えられる。

史料研究においては、五味克夫が伊作城跡をはじめとして、建昌城跡などを取り上げ、県・市町村教育委員会の実施する発掘調査の多くにも、史料からの考察をおこなった³⁾。城に関係する史料と、その地域の同時代の史料をあげて、はやくから発掘調査の成果と比較検討されながら、周辺地域の歴史像を説き明かして、中世史への位置付けをおこなった。このほかに中野翠による高山城や南郷城の研究や⁴⁾、三木増による平山城の研究などがある⁵⁾。河野治雄は、近世までの史料を検討し、谷山城と地域の歴史を語っている⁶⁾。このなかで河野は、発掘調査の成果から、「外城」とよばれる近世の麓の、「谷山郷」へ地頭所が移るまで、近世前半に山城である谷山弓場城を使用していた時期があったと述べている。

縄張りについては1932年に林吉彦が清水城跡を中心とする研究⁷⁾の中で、清水城跡、東福寺城跡、高山城跡などに

串木野城の縄張構成



第1図 串木野城の縄張構成

ついて縄張り論を論じた。鹿児島県における中世山城跡の最初の実地調査の記録である。その後福田信男は薩摩郡内の城跡を踏査し、実測図・見取図・鳥瞰図を作成し¹⁾、薩摩郡内の127か所の城跡について実測図を作成したといわれる。現在は全城の解説と33ヶ城跡についての実測図・見取図・鳥瞰図の付された復刊本が活用されている。位置・現状・文献・備考として各城跡が整理され、広域な城域を認識し、周辺地形への視点や遺構への考察を行った画期的な調査記録である。城跡の調査と保存の必要性を繰り返して述べ、調査・保存への地元当局の支援を訴えかけている。時は過ぎても、現在の文化財保護にたずさわるものとして肝に銘じたい。その後1970年代後半から三木靖を中心として研究がなされ、三木は横川城跡・吉田城跡・大口城跡などを初めとして、多くの城跡を踏査し縄張り図を作成するとともに、その歴史的な位置付けを行った²⁾。発掘調査においても縄張り図は開発との調整や調査地点の選択等で欠くことのできない資料である。

五味克夫・三木靖を中心とするこれらの研究は、時を同じくして増加して行く開発事業に伴う発掘調査の成果とあいまって、中世山城跡は総合的に考察されることとなった。

本県の城館跡について現地踏査の成果を含めて所在地・城主等の一覧表を作成し集成したものに、小幡晋³⁾や三木靖⁴⁾がまとめたものがある。

昭和57年(1982)から61年まで行われた県教育委員会文化課の企画による県内の中世山城跡の踏査調査は全国的にも注目される調査であった⁵⁾。これは全市町村に文献調査・遺構調査・伝聞調査について98頁～99頁のような調査カードを配布し、各市町村に1～3名の調査員を委嘱し、またその下に調査補助員や調査員助手をおいて、城跡毎に調査カードの項目の調査をしてもらう。指導委員会と文化課職員が指導・助言しながら調査を実施し、作成した調査カードを基本台帳として保管し、城跡の保護のための基礎資料とする。また調査報告書を作成して関係機関に配布するものであった。この結果県下944か所の城跡の調査を行い、841か所が現存するとした。この基本台帳は調査カードを作成し、詳細にわたって山城跡についての記述があり、調査当時の現状をあらわす写真等も添付してあり、市町村にとっても重要な資料である。これにより中世山城跡の城域の把握がなされ、市町村内での中世山城跡の認識が高まり、調査員として中核となった文化財保護審議委員会が活性化するなどの成果があった。一方で行政資料としての遺跡地図への書き写しが進まず、調整に齟齬が生じることもあった。現在は遺跡地図のGIS化が図られ、区域を示してある。市町村においても調査カードは保管されているはずであるが、もしなければ県の基本台帳から早急に複写しておくべきであろう。

1980年代になって城跡の発掘調査が増加してくる。シラス採取により消滅の危機にさらされた平泉城跡の発掘調査は、

その遺構の残存状況の良さが注目された。1980年～81年に調査された苦辛城跡では、広大な山城域のほとんどを調査域とし、ほとんど全域を伐採し、露出した地形に応じた調査がなされた。水源遺構や小さな帯曲輪、曲輪の関係性の把握等全面的調査の有効性を示した。全体を地形測量し、山城の使用時期、改修状況、正確な曲輪の形や配置、建物跡や橋列・空堀や道や虎口などが、空間として関連づけられながら位置付けられた。その後鹿児島県で発掘調査された中世城跡の報告書を年代順で古い方から並べると以下のとおりである。

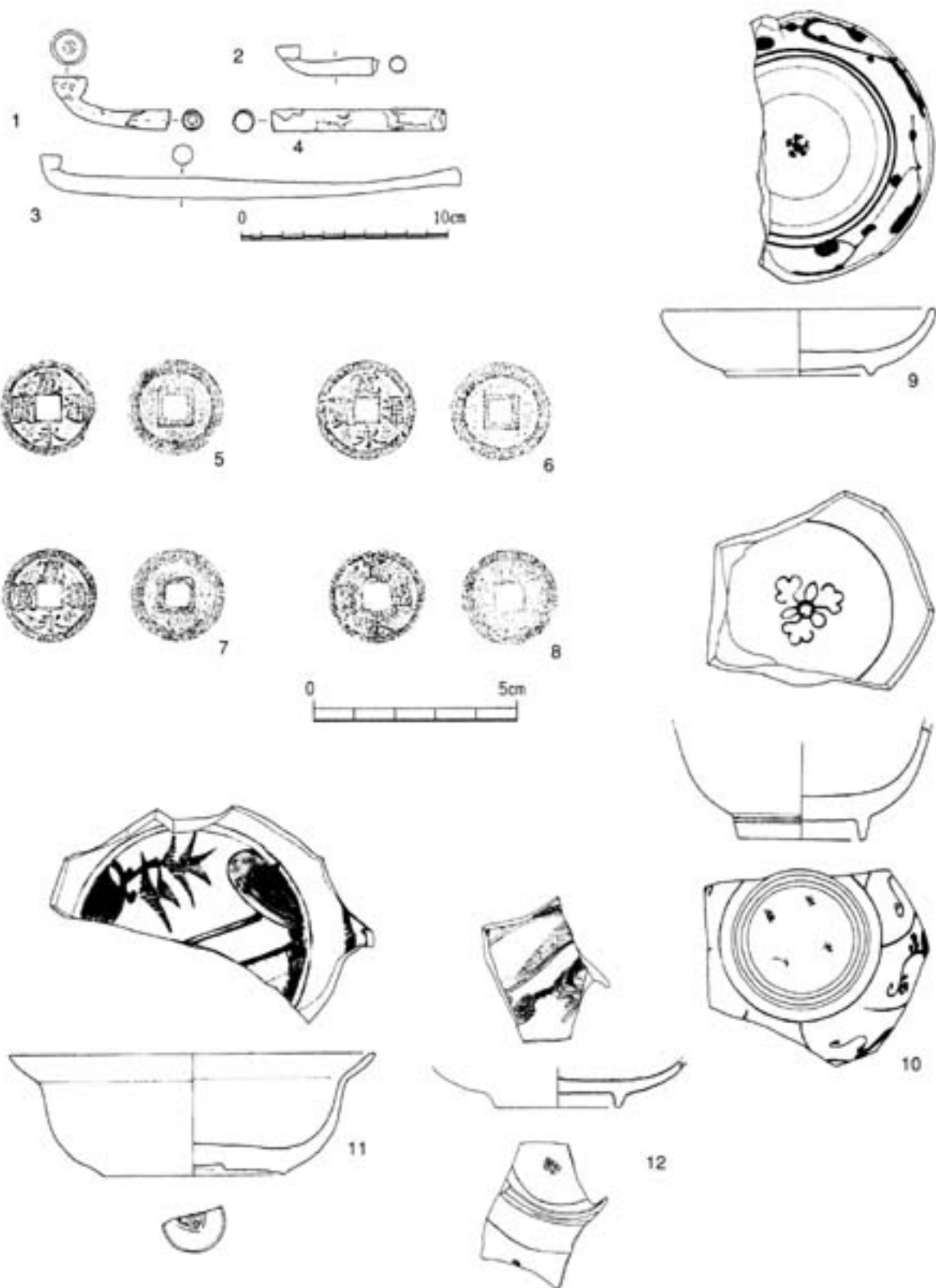
- 1 1977 加世田市教育委員会「村原(椿ノ原)遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 2 1979 鹿児島市教育委員会「大能遺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 3 1980 加世田市教育委員会「上ノ城跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 4 1981 鹿児島県教育委員会「中尾田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 5 1981 鹿児島県教育委員会「加栗山遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 6 1982 大口市教育委員会「平泉城跡」大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 7 1983 鹿児島県教育委員会「苦辛城跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(27)
- 8 1984 河口貞徳・本田道輝「廻城一落城と出土遺物」『鹿児島考古』第18号鹿児島県考古学会
- 9 1984 川辺町教育委員会「平山城跡」川辺町埋蔵文化財報告書(1)
- 10 1985 国分市教育委員会「城山山頂遺跡」国分市埋蔵文化財調査報告書(2)
- 11 1987 加世田市教育委員会「村原(椿ノ原)遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 12 1987 鹿児島県教育委員会「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(43)
- 13 1987 横川町教育委員会「横川城跡」横川町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 14 1988 伊集院町教育委員会「一字治城跡」伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 15 1989 鹿児島市教育委員会「鹿児島市の中世城館跡」鹿児島市文化財調査報告書(6)
- 16 1989 鹿児島県教育委員会「下伊倉城跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(50)
- 17 1990 伊集院町教育委員会「一字治城跡」伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 18 1991 始良町教育委員会「建昌城跡」始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 19 1991 伊集院町教育委員会「一字治城跡」伊集院町埋蔵

- 文化財発掘調査報告書（5）
- 20 1992 鹿児島市教育委員会「谷山弓場城跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）
- 21 1992 鹿児島市教育委員会「清水城跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）
- 22 1992 知覧町教育委員会「知覧城跡」知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 23 1992 蒲生町教育委員会「蒲生城二之丸跡」蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 24 1992 伊集院町教育委員会「一字治城跡」伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
- 25 1993 金峰町教育委員会「牟礼ヶ城跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 26 1993 知覧町教育委員会「南別府城跡」知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 27 1993 鹿児島市教育委員会「谷山菊地城跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（17）
- 28 1994 鹿児島県立埋蔵文化財センター「本御内遺跡（舞鶴城跡）」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（12）
- 29 1994 鹿児島市教育委員会「川上城跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（18）
- 30 1994 伊集院町教育委員会「一字治城跡」伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
- 31 1994 知覧町教育委員会「知覧城跡（二）」知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 32 1994 串良町教育委員会「稲村城跡」串良町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 33 1994 始良町教育委員会「始良町中世城館跡」始良町文化財調査報告書（1）
- 34 1994 鹿児島県考古学会「鹿児島県の中世山城」「鹿児島考古」第28号鹿児島県考古学会
- 35 1994 宮之城町教育委員会「松尾城及び宗功寺跡（発掘調査の概報）」宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 36 1995 加世田市教育委員会「別府城跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
- 37 1995 鹿児島県立埋蔵文化財センター「平松城跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（13）
- 38 1995 鹿児島県立埋蔵文化財センター「本御内遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（14）
- 39 1995 宮之城町教育委員会「松尾城及び宗功寺跡（2）」宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 40 1997 鹿児島県立埋蔵文化財センター「本御内遺跡Ⅲ」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（17）
- 41 1997 宮之城町教育委員会「松尾城及び宗功寺跡（3）」宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 42 1997 市来町教育委員会「鍋ヶ城跡」市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 43 1997 鹿屋市教育委員会「鹿屋城跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（53）
- 44 1998 鹿屋市教育委員会「鹿屋城跡（Ⅱ）」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（54）
- 45 1999 吹上町教育委員会「亀丸城跡」吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書（13）
- 46 1999 薩摩町教育委員会「中津川城跡」薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
- 47 1999 出水市教育委員会「松尾城跡」出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
- 48 1999 鹿屋市教育委員会「谷平（Ⅳ）遺跡・鹿屋城跡（Ⅲ）」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（57）
- 49 2000 鹿児島市教育委員会「鹿児島（鶴丸）城二之丸跡G地点」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
- 50 2000 鹿児島市教育委員会「谷山城跡E地点」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（31）
- 51 2000 市来町教育委員会「上城・誌城跡」市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 52 2000 串木野市教育委員会「串木野城跡」串木野市埋蔵文化財発掘調査（2）
- 53 2000 東郷町教育委員会「鶴ヶ岡城跡」東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 54 2000 大隅町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所「日輪城（恒古城）跡」大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（20）
- 55 2001 鹿児島市教育委員会「大龍遺跡第7次・第8次」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（32）
- 56 2001 鹿児島市教育委員会「大龍遺跡B地点」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（34）
- 57 2002 始良町教育委員会「建昌城跡」始良町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
- 58 2002 鹿児島県立埋蔵文化財センター「松尾城跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（42）

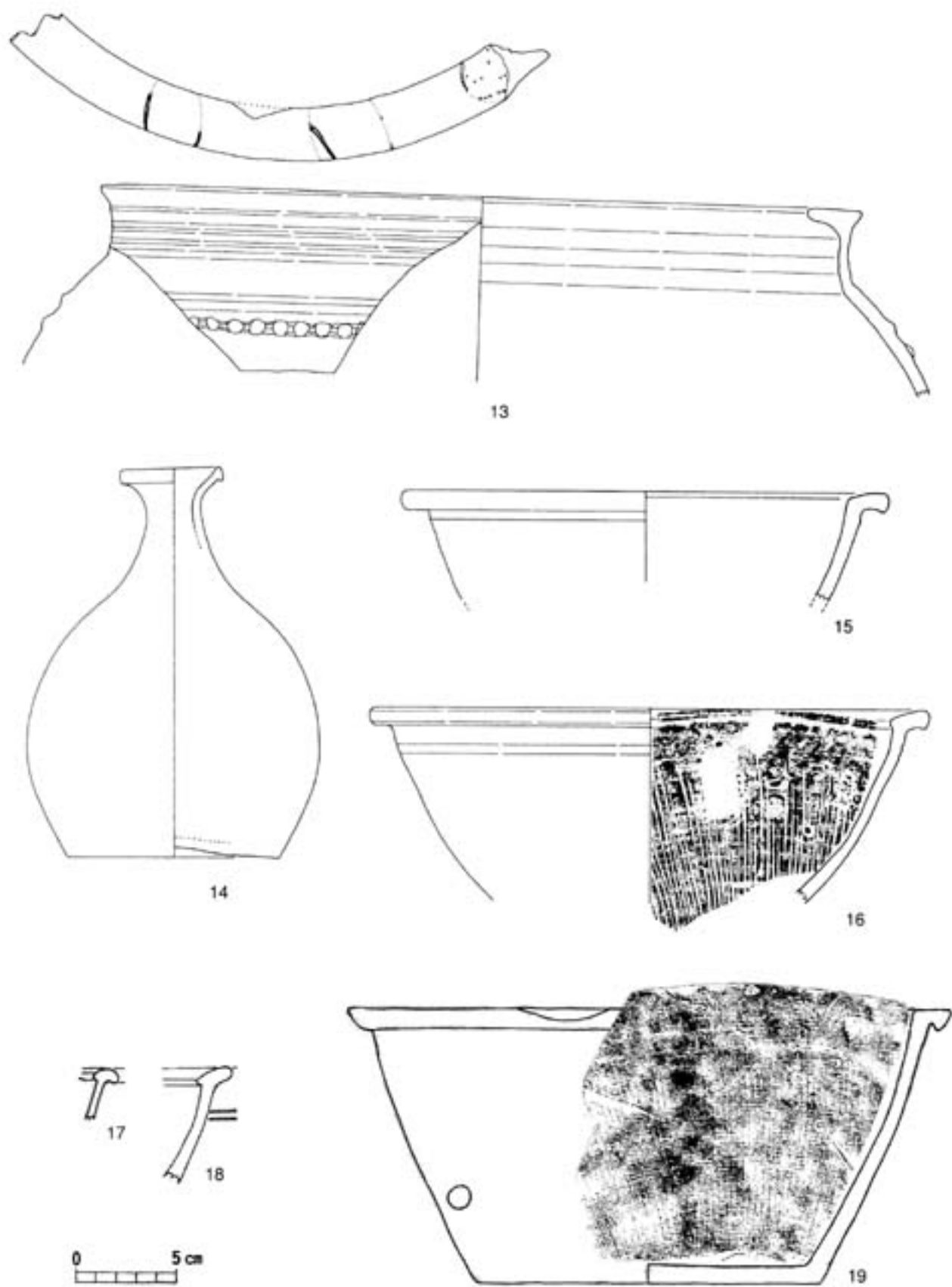
県内ではシラス採取や宅地造成、また治山工事等に伴う発掘調査が日常的に行われている。これらは小規模であったり、発掘費用の原因者負担が困難であったり、崖上や崖下のため調査が困難であったり、調査そのもの以外のことで膨大なエネルギーを費やすことが多かった。開発の把握や、開発者との調整、発掘調査の範囲等で、いわば受け身の発掘調査から踏み出そうとした取り組みに、分布調査による城域の明確化と周知化、文化財保護サイドが主体的に行う中世山城の範囲・性格の確認調査がある。前者の分布調査は始良町・鹿児島市の取り組みであり、後者の確認調査が串木野城（串木野市）・鶴ヶ岡城（東郷町）・楠川城（上屋久町）・額姪城（額姪町）・赤木名グスク（笠利町）など

城跡	市町村	外城圏	近世遺物	遺物・遺構の中心時期(世紀)	備考	文献
川上城跡		×	なし	14~16	近世染付採集、吉石跡(近世)有	5・29
清水城跡	鹿兒島市	○	煙管、寛永通寶2、陶磁器類(薩摩焼等)	15~16中		2・21・55・56
苦辛城跡		×	寛永通寶3	13末~16	墓	7
谷山城跡		○	肥前陶器、薩摩焼、寛永通寶3	14中~16	本城、弓形城、菊地城	20・27・50
尾守ヶ城跡		×	なし	12~13・15~16		1・11
上ノ城跡	加世田市	×	なし	13~16中		3
別府城跡		○	肥前陶器、薩摩焼、琉球陶器	12~17世紀でⅢ期		36
鹿屋城跡	鹿屋市	○	近世磁器	15~16		43・44・48
串木野城跡	串木野市	○	清朝染付(19初)、寛永通寶	15後半~16前半・16後半	鉄砲玉	52
松尾城	出水市	×	なし	14~15 箱掘16		47
国分新城跡	国分市	○	陶磁器	16~17		10・28・38・40
平泉城跡	大口市	×	なし	14~16でⅢ期 15中~16中中心		6
建昌城跡	結良町	×	煙管(18世紀) 寛永通寶3	15後半		18・57
知寛城跡	知寛町	○	染付、薩摩焼	14~17初		22・31
南別府城跡		×	寛永通寶2(塚出土) 清朝染付、肥前陶器、薩摩焼	18	近世屋敷跡	26
薩生城	薩生町	○	なし	15	二ノ丸伝道師寺跡	23
牟礼ヶ城跡	金峰町	×	なし	14	二階堂氏	25
一字治城跡	伊集院町	○	薩摩焼	12後半、南北朝、16世紀		14・17・19・25・30
鍋ヶ城跡	市来町	×	なし	14~15		42
上城・舌城跡		×	なし	13~14	鉄砲玉	51
亀丸城跡	吹上町	○	なし	13~16		45
片城跡	横川町	×	寛永通寶	13~16	五世墓	4
横川城跡		○	薩摩焼、煙管	15後半~16		13
細城	福山町	×	なし	13、14~15	武器、大太刀、和銃等の一括埋納	8
平山城跡	川辺町	○	近世染付、薩摩焼、寛永通寶3	14末~16		9
松尾城	宮之城町	×	薩摩焼、肥前陶器、煙管	17~18 初跡・建物跡	宗功寺の関連	35・39・41・58
中津川城跡	薩摩町	×	なし	鎌倉・徳文時代早期		46
鶴ヶ岡城跡	東郷町	○	煙管、洪式通寶(加治木鉄)、染付	16前~半ば		53
下伊倉城跡	東串良町	×	なし	16	高山城の外城	16
福村城跡	串良町	×	寛永通寶	15	近世墓	32
平松城跡	末吉町	×	なし	16		37
日輪城跡	大隅町	×	なし	16前~半ば	鉄砲玉・炉状遺構	54

第1表 中世山城跡近世遺物出土一覧表



第2図 中世山城跡出土遺物 (1)



第3圖 中世山城跡出土遺物 (2)

の取り組みであった。さらに名瀬市のグスク分布調査では多くのグスクが確認され、新たな視点を提供している。

3 中世山城跡出土の近世遺物

中世山城跡に最後の手が入られるのは、関が原の戦いに破れ、徳川幕府の南下に備えたものであるという。もちろん841か所がすべてではなく、交通の要衝で、地域の本城として重要視され、戦国期に使われたものが中心であろう。串木野城は16世紀末以降に最終的に造成され、そのまま残された可能性がある²¹。また薩摩藩が兵農分離を進め家臣団を再編成する際に、当初は中世山城跡の大手口付近に有力家臣群が配置されたことが、出水市の亀ヶ城跡にみられ²²、国分市の国分新城跡の「国分郡屋形跡」とある古地図には重臣たちが国分新城の城内に住んでいた時期がある²³。藩生籠の成立期においても、藩生籠の城山の麓の三の丸の迫地区において居住し、今日の役場付近の麓に移ったのは享保の年代と思われることから²⁴、初期の外城形成期にあっては、戦略上の要地の城についての防備は確実に受け継がれて行くことが示されている。17世紀の前半の遺物は出土する可能性があるということである。

第1表は発掘調査された中世山城跡で出土した近世遺物についてまとめたものである。発掘調査の規模については、部分的なものが大部分である。発掘調査の規模や調査地点・曲輪などによって一様に遺物が出土するものではないが、寛永通宝・煙管・薩摩焼・肥前陶器、清洲染付などが出土している。籠を形成した山城跡で近世遺物が出土していることがわかる。第2図1～4は始良町建昌城跡出土の煙管で、18世紀代のものである。煙管については、三垣恵一が出土地名表を作成し考察している²⁵が、煙草を吸うようになったのは16世紀末頃からであることが確実で、県内では17世紀後半からのものが出土している。寛永通宝(5～8)は初鑄年が寛永13年(1636)とされており、1636～1659年までの古寛永銭とそれ以降の新寛永銭がある²⁶。背に「文」字のはいる文銭や、もっとも多量に鑄造された18世紀中頃のもの新寛永銭である。古寛永銭と新寛永銭のどちらも出土している。第2図は宮之城町松尾城跡出土のものであるが、5・6・7が古寛永銭で、8が新寛永銭である。薩摩焼は黒物の甕やすり鉢等を中心とし、18世紀台がもっとも多い。薩摩焼の摺鉢については、渡辺芳郎により、編年観がまとめられている²⁷。第3図13・14は松尾城跡出土の徳利と貝目をもつ甕である。この甕は串木野城跡でも出土している。摺鉢は渡辺の仮称3型式(15～18)と4型式(19)で、松尾城(16)と加世田市別府城跡(15)、鹿児島市谷山城(17～19)のものである。仮称3型式は18世紀代に、仮称4型式は19世紀代とされる。肥前陶器は9～11は別府城跡出土のもので、12が東郷町鶴ヶ岡城跡出土のものである。9は波佐見系染付で、内側につる草文、見込に蛇の目状の輪はざが見られ、その内に五弁花文がある。10は外側に

仙芝祝寿文、高台内側に大明年製が描かれている。11は蛇の目高台の内側に「満福」があり、口縁部内側に草文を描く。12は高台内側に「福」字文がある。これらは18世紀代のものである。このほかに火舎や石臼が出土することもあり、遺物からは近世の時期に城跡内にいて、簡便な生活がおくられたことを窺わせるものである。煙管・寛永通宝については、畑仕事や山仕事での一服や紛失品、近世墓の副葬品の可能性も捨て切れないが、谷山城・串木野城・知覧城・別府城等では、併せて陶磁器等が出土してくることから、短期間にしろ居続けたことがわかる。

(出土遺物の資料の引用は各中世山城の報告書からであり、註は省略)

4 史料から見た近世の中世山城

中世の山城のうち、近世薩摩藩の外城制度に組み込まれたものも多い。外城制度とは本城を中心として、領内各地に支城を配置し防衛拠点とし、且つそれを中心とする内政上の区画を設けたものである。籠の武士が軍団を形成してそのまま地頭の指揮で動員される。藩政初期には軍事的機能に重点が置かれ、その後は政治・交通の便により、新しい外城や籠の形成もおこなわれた。その城警施設は一國一城令とともに全廃したが、城跡はいずれも城山あるいはお城と呼ばれ、猶ほ有事の際は利用されるべきものであった²⁸。鹿児島県の中世山城跡については、藩政期にも関心が寄せられていて、関連する資料が三木靖によりまとめられている²⁹。元和元年(1615)「一國一城令」の後に、寛永十年(1633)幕府巡見使小出吉親らの「一國一城令」に違法の疑いと質問に家老川上久因が「太閤下向の際に領国が減じ、そのため武士がもどってきて人が増え、米が乏しく、古小城を壊すと田畑を埋め人民が飢える」との申し開きをした。窮乏な経済事情が理解され、外城制度が黙認された³⁰とある³¹。

藩政期の関心の高さは、古城等の旧跡としての史料にみられ、文政7年(1824)の「薩藩名勝誌」³²に古城として61ヶ城を数え、寛政元年(1789)の幕府上使への答申書には「國中古城之事」26ヶ城が上げてあり、「當分ハ山野之林二候」としている³³。天保14年(1843)編集の「三國名勝図会」³⁴のなかで、各郷の城跡をとりあげ、本県のみで292ヶ城が掲載されている。個別の城跡について元禄12年(1699)「古田松尾之城」の絵図³⁵、元禄12年(1699)川辺町平山城についての「川邊大境井内繩引帳」³⁶や、同じく元禄12年の「國分新城綱引帳」³⁷の写しが残っている。寛政四年(1792)「名所旧跡御札方取調帳留」には知覧城の城郭の範囲面積、本丸の高さ、曲輪の呼称や配置が記される³⁸。また天保5年(1834)3月に写された「藩生龍ヶ城跡」の絵図などが残されている³⁹。加えて、『藩生土族共有社其源』のなかに「御地頭御問答写」があり⁴⁰、慶応元年正月(1864)に答申した文書を慶応二年寅五月に写されたものに、防戦時

のことを問われた内容がある。この中に、「蒲生本城は壊れたところがない」ことや、「帖佐の平安城に集まって防ぐ」「山田の藤原城で防ぐ」「愛宕山の永福ヶ城で防ぐ」との記述があり、これは蒲生のみならず、各郷の地頭が下問されたものと考えられる。幕末の緊張状態の史料ではあるが、江戸時代を通して本城の他の山城が認識されていた。これらから江戸時代をとおして地元の郷士たちが中世山城跡について十分認知していたことを示している。

「當分ハ山野之林二候」は一國一城令をはばかり、あくまで公的なものであって、外見上はそうであっても、城の諸施設の崩壊につながるものについては、手を入れて来た可能性が強いと考える。

このように中世山城跡についての認識は十分持ち合わせているなかで、中世山城跡である城山の管理をしていたかであるが、以下の史料がある。

蒲生籠は出水籠とともに、おおきな外城であるが、その『御仮原文書』の中の「蒲生衆中高帳」²¹にみえる諸役のなかに、元禄7年(1694)・正徳元年(1711)・元文3年(1738)にそれぞれ御城内山留役がみられ、役高が記されている。また国分新城についても、前出の「国分諸古記」の中の元禄12年の「國府新城綱引帳写」に「新城山留衆」とある²²。薩摩国山崎郷では「山崎御仮原文書」慶応4年(1868)に、「御城見廻老人」がみえる²³。これらの史料から、郷士の所役に「城山見廻」があり²⁴、城山の維持・管理が郷士の職務として存在していた。

管理においては、鹿児島県立図書館所蔵の「薩摩御城下絵図」に(鹿児島)城山に番所があるが²⁵、一時はこれと同じような番所や仮小屋を設けて管理し、それが「山留役」「山留衆」として職名に残存していったのではなかろうか。このため前章で述べた近世の日常品が残されることとなった。

5 まとめ

中世山城跡は、元和の一國一城令を受けても、破城とされず、そのまま一部は籠集落に取り込まれて管理されていく。シラスの丘の切り込みを中心に土塁・曲輪・空堀等を作り出す作業は、他地域の石垣や土塁などの中世末の城郭とは異なって構築や改修が容易であり、破城の痕跡も明白ではなかったと考えられる。放置すれば、山野と化し、城としての機能を失ったかに見える。曲輪や土塁の木々や土壌の発達、地滑りの原因となり、さらに放置すれば曲輪縁辺の土塁は次々と崩壊していくものと考えられる。しかしながら現在残る中世山城跡は、高い土塁を残し、深い空堀を有し、曲輪もよく残存している。崩壊につながる大きな雑木の伐採など少なからず管理され続けた。明治維新について、薩摩藩の郷士数の多さが、兵の徴集・編成を容易にしたといわれるが、つねに軍事的な拠点を認知しながらシュミレーションされていたのではなかろうか。重要な中世山

城跡については、江戸時代前期については仮小屋等を設置し、その後は郷士に所役を残して管理をおこなってきた。そのため外城制度に組み込まれた中世山城跡においては、近世遺物が出土するのである。

外城制度の籠集落の中の中世山城跡は地域の伝統の証しであり、郷士の精神的な紐帯として近現代も機能しつづけてきた。そのため残存している多数の中世山城は、交通の便や立地に恵まれた城跡もありながら、いまだに現代の諸開発から守られ続けて来たのである。はじめに述べた串木野城跡の奥村氏・肝付氏が、警察・司法をつかさどる横目の職家にあつたことは偶然ではない。

中世山城跡の発掘調査は、中世山城が広大な城域をもつことから、ほとんどが諸開発事業にあつては部分的とならざるを得ない。小規模・部分的な発掘調査だからこそ、明確な目的意識をもたなければ、発掘調査自体が破壊の免罪符的役割としかならない。これらの発掘調査はいずれ成果としてまとめられ、住民に総合的に歴史的に呈示されなければならない。そうでなければ城跡の歴史性や重要性が認識されずに、開発にさらされ、消え行くのである。城跡は城域全体の把握が必要であり、災害や治山事業等により止むおえない場合も多いが、諸開発によって切り取られ、全貌が把握されることもなく、市民に歴史が語られる事なく消滅してしまうことを危惧しているところである。史料収集や古文書等の解釈に、県歴史資料センター黎明館の栗林文夫氏に特にお世話になった。出水市の岩崎新輔氏・宮之城町の川添俊行氏・知覧町の上田耕氏・鹿児島大学祖蔵文化財調査室の新里貴之氏にも資料収集等で協力を得た。記して感謝したい。なお、近世遺物については、黙殺され報告書に掲載されていない可能性もある。出土していないとした中世山城跡から出土していることもあるだろう。主要でない遺物から、別の時代の重要な資料や、別の機能を暗示する可能性もあり、資料の扱いについては十分な検討が必要であろう。史料の引用が原典からのものでなく、郷土誌や引用文献・報告書からの引用になってしまった。近世文書への不勉強のためだが、どうか御寛知願いたい。

【註】

- 1 上田 耕 2000 「串木野城の城域と構成」『串木野城跡』串木野市教育委員会
- 2 三木 清 1987 「研究資料よりみた本県の中世山城跡」『鹿児島県の中世城跡』鹿児島県教育委員会
- 3 五味克夫 1967 「伊作城跡」『(鹿児島)中世史研究』第7号鹿児島中世史研究会 1971 「建昌城の史料」『中世史研究会報』第30号鹿児島中世史研究会 など
- 4 中野 翠 1984 「中世高山城と肝付氏について」『鹿児島県の歴史と文化』鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 5 三木 清 1984 「平山城の変遷—応永24年合戦を中心として」『平山城』川辺町教育委員会
- 6 河野治雄 1992 「谷山氏の時代と龜山郡の歴史」『谷山町城跡』鹿児島市教育委員会
- 7 林 吉彦 1932 「考古学上より見たる清水城跡」『熊本県史』
- 8 福田信男 1937 「薩摩郡に於ける古城址の調査」『川内郷土史研

- 研究会 1987復刊)
- 9 三木 靖 1980 「屋久島の楠川城」『歴史読本』第25巻 第15号 新人物往來社
- 1982 「吉田松尾城の研究—その変遷及び縄張りについて—」『鹿児島短期大学研究紀要』第3号
- 1983 「大口城跡の絵図と縄張り」『鹿児島短期大学研究紀要』第31号など
- 10 小幡 晋 1974～76 「大隅・日向古城遺址名録」『大隅』第17～18号大隅史談会
- 11 三木靖編 1979 「鹿児島県」『日本城郭大系』第18巻 新人物往來社
- 1981 「鹿児島県主要城跡一覧」『鹿児島大百科事典別冊』南日本新聞社
- 12 鹿児島県教育委員会 1987 「鹿児島県の中世城館跡」
- 13 串木野市教育委員会 2000 「串木野城跡」
- 14 「出水諸家系譜集」『志賀氏系図』『出水市郷土誌』p.308 1968
- 15 国分市 1973 「国分郷土誌」p.252
- 16 蒲生町 1991 「蒲生郷土誌」p.264 文政9（1826）「地頭御屋棟札」による
- 17 三坂恵一 2000 「鹿児島県内出土の煙管について」『大河』第7号
- 18 川根正数 1995 「寛永通寶銭の基礎的研究1（上）」『出賃』第4号出土銭貨研究会
- 1996 「寛永通寶銭の基礎的研究1（下）」『出土銭貨』出土銭貨研究会 第5号
- 19 渡辺芳郎 2000 「近世薩摩地誌考」『鹿児島考古』第34号 鹿児島県考古学会
- 20 鹿児島県 1940 「鹿児島県史」第二巻
- 21 註2と同じ
- 22 原口虎雄 1981 「外城制度」『鹿児島大百科』南日本新聞社「川上久國雜記」よりの引用とある
- 23 註2より 1824 「薩藩名勝誌」による
- 24 「藩法集 8 鹿児島藩上」『高津家列朝制度』巻之6 創文社 1969
- 25 「三国名勝図会」天保14年編集 明治35年（1905）刊 昭和57年復刊 青潮社
- 26 三木 靖 1982 「吉田松尾城の研究—その変遷及び縄張りについて—」『鹿児島短期大学研究紀要』第30号
- 27 川辺町教育委員会 1984 「平山城跡」町立図書館に保管
- 28 「國府新城縄引帳写」『国分譜古記』『国分郷土史資料編』1997 国分市
- 29 知覧町教育委員会 1992 「知覧城跡」
- 30 蒲生町 1991 「蒲生郷土誌」p.216
- 31 「御地頭御問答写」『蒲生士族共有社其源』『蒲生郷土誌』p.379 1991 蒲生町
- 32 「蒲生衆中高帳」『御飯屋文書』『蒲生郷土誌』p.219 1991 蒲生町
- 33 註28 p.225
- 34 「山崎御飯屋文書」『宮之城町史』p.213 2000 宮之城町
- 35 註20 p.166
- 36 「薩藩御城下絵図」鹿児島県立図書館蔵「黎明館常設展示解説図録」p.51 1996